

巻 頭 言

学会活動における情報共有と発信について

細田眞司 日本精神神経学会副理事長
Shinji Hosoda

本学会は16,000人の会員（うち、精神科専門医約10,000人）を有し、専門医基本領域19学会の1つとして、社会的な役割は年々重くなっている。学会活動において、会員の情報共有と情報発信は重要な柱である。学会の規模が大きくなり、活動が多岐にわたっていることから、この点について現状を整理してみたい。

学術団体として、大きな柱になるのは、年次学術総会、精神神経学雑誌（精神経誌）、Psychiatry and Clinical Neurosciences（PCN誌）である。精神経誌では、学術総会のシンポジウムの中から総説化することが望ましいものの特集として編纂し、特別講演、教育講演を掲載している。また、PCN誌では、昨年のWPA Regional Congressのシンポジウム「Internet Addiction」をSpecial Issueとすることが決定され、2016年70巻9号に掲載予定である。本学会には48の委員会があり、精力的に活動しているが、その委員会の成果と課題をシンポジウムとして会員と共有し、それらが学会誌に掲載されている。このように、3つの柱が相乗的に会員の情報共有の場となっている。また、この3つは情報発信としても大きな効果を上げているといえる。精神経誌に掲載された論文は、公的な価値が高く、あるときには精神科医療の基礎資料となり、政策に反映されることもある。PCN誌は、インパクトファクターがほぼ2.0に回復する見込みであり、本邦から世界への発信に大きく寄与している。

3つの柱に加えて、学会ではさまざまな取り組みを行っているので、紹介したい。

まず、広報委員会の担当するホームページ（HP）の充実が挙げられる。2011年からセキュリティの確保された会員専用ページを運用することにより、会員の情報共有を促進している。2015年度にはHPの更新は227回行われており、コンテンツ数としては392におよび、学会活動をほぼ網羅する体制が確立している。学会声明、見解もHPに掲載し、発信力を高めているため、報道機関などからの問い合わせも多くなった。HPでは、一般の方に精神科医療への理解を深めていただくために、「こころの病気について」欄を新設し、会員のその領域での専門家に執筆をしても

らっている。HPでは、eラーニングを2013年より開始し、学術総会、研修会の中で重要なものを配信している。2014年に行われた薬物研修では約7,000人がeラーニングを視聴された。今後は、専門医の共通講習（医療安全、医療倫理、感染対策など）についても、2016年9月頃からeラーニング配信を行う予定である。

HPの会員専用ページでは、会員諸氏に登録情報を管理していただいているが、メールアドレスを登録している会員は14,622人（会員の86.8%）であり、専門医においては10,104人（専門医のうちの96.2%）が登録されている。この割合は、基本領域学会の中でも一番高い数字である。このような会員諸氏の協力により、メールによる情報配信（情報共有）を行うことが可能となっている。2015年度はメールマガジンを131本配信した。メールマガジンは、会員の属性により配信しているので、ニーズに沿った情報提供が行われていると考えられる。

情報発信として、報道関係者への情報提供を開始している。2013年から学術総会の前に、プレスセミナーを開催している。2016年5月のプレスセミナーでは、新たな専門医制度と幕張総会のトピックをテーマとして、34社、50人の参加があった。個別の事象についての記者勉強会を開催することとし、第1回として「性同一性障害」を2016年3月に実施した。20社、22人の記者が参加し、熱心な質疑応答があった。年に数回の記者勉強会を開催し、精神医学、精神科医療について、正確な基礎知識、情報に基づいた報道がされるよう継続した取り組みを行っていく方針である。

医学生、初期研修医への啓発活動として、2013年からサマースクールを開催している。毎回約40人の参加があり、講演会、精神科医療機関の見学、懇親、相互交流が行われている。2016年からは、レジナビの学会ブースに出展し、精神医学、精神科医療について、医学生、初期研修医への情報提供を行う予定である。

以上のように、本学会では、情報共有と発信に関して、多岐にわたる取り組みを行っている。今後も、会員諸氏の協力により、一層の充実をはかっていく方針である。